

「天気」編集への一つの提案

1. はじめに

最近「天気」誌上に気象学会のあり方或いは「天気」の内容についての提言がなされている（沖，1995；松野，1996）。これらの提言を実際に生かすための議論のきっかけとするため、「天気」に特定の分野の論文等を掲載する部分を設けるとする筆者の提案を述べる。広く会員の批判を仰ぎたい。

始めに最近「天気」に掲載された意見を振り返り、次に外国の気象学会の機関誌の事例を述べ、最後に筆者の提案を記す。

2. 「天気」のあり方についての最近の提言

松野理事長は「天気」巻頭言（松野，同上）で、気象新聞（1995年11月20日）のインタビュー記事を引用しつつ、{これからの気象学会の活動として「気象庁職員と大学の気象学者だけの学会から、天気図少年や現場の気象予報士まで全学会員のための学会にしたい}との抱負を示している。そしてこれを実現するための具体的方策として「天気」の内容を多様化することなどはまず第一に行うべきことであろうが、編集体制や財政的基盤など解決すべき問題が多く、具体的方策は簡単にはでてこないと述べている。

沖（同上）の分析によれば気象予報士試験合格者に占める気象学会員の比率は、第1回（500人合格）と第2回（313名合格）でそれぞれ43%、32%である。また第1回試験の合格者中で気象庁関係者の比率（39%）は大学・研究機関の比率（6%）よりかなり高い¹¹。このように気象予報士の合格者と気象学会の主要な活動を担う集団とはかなり異なっている。沖（同上）はこの分析から、気象学会が気象の応用分野を積極的に取り込むよう学会運営を改革し、応用分野に興味のある読者に貢献する記事が「天気」などの機関誌にどしどし掲載されるようにすること、民間の気象情報提供組織に学会活動へのより積極的参加を求めることなどを提案している。

上に引用した2つは共に、応用分野の論文を増やして「天気」の内容を多様化し、気象予報士など多くの

会員が参加し得る幅広い学会活動を提言している。

3. 外国の気象学会の場合

議論の参考に、米国と英国の気象学会機関誌の状況を示す。

米国気象学会（AMS）は以下の6種類の論文誌を刊行している。Journal of the Atmospheric Sciences, Monthly Weather Review, Journal of Climate, Journal of Applied Meteorology, Journal of Atmospheric and Oceanic Technology, Weather and Forecasting。「天気」に相当するのは、Bulletin of the American Meteorological Societyである。

応用分野の論文誌は次の2つである。Weather and Forecasting（1986年創刊）は天気予報の技法（technique）、新しい解析方法の応用、天気予報の検証の研究、天気予報に直接応用可能なメソあるいは総観スケール現象の事例研究に関する論文を掲載する。この雑誌は現場の予報あるいは予報の利用に直結した内容を目指していて、現場の予報者と研究者との間の生産的な対話手段としたいとの編集者の抱負が創刊号に記されている。この雑誌には天気予報の利用価値（経済効果）を論じた論文が時々掲載される。この種の論文は日本気象学会ではほとんど見かけない。Journal of Applied Meteorology は、環境と健康、気象改変、大気汚染気象、水利気象、農業気象、森林気象等に関する論文を掲載する。

英国王立気象学会（RMS）は1994年に Quarterly Journal of the Royal Meteorological Society に加えて、新しい論文誌 Meteorological Applications を創刊した（「天気」に相当するのは Weather である）。この雑誌は、気象学の応用領域が広がってきていることから、応用気象学の研究者、予報者、気象情報の利用者に、気象情報の利用と経済効果、気象情報を支える科学技術、観測、データ交換、データ処理、データ表

¹¹ 気象学会員に占める気象庁職員の割合は1997年7月現在、36%（4100人中、1481人、事務局調べ）である。沖は第27期評議員会の資料から、この比率を47%としているので、気象庁職員の割合はこの2年間で10%低下したことになる。

示システム、現象の解析や予測、数値モデルの性能と結果の解釈、海洋や気候モデルの実用的な利用に関する情報を提供することを目的としている(高谷, 1995)。Meteorological ApplicationsもWeather and Forecastingも天気予報や気象情報の利用を強く意識している点が共通している。

4. 「天気」の編集についての提案

「天気」の内容の多様化、応用分野の拡大の提言を具体化する手段として「天気」に特定分野の論文等を掲載する部分を設けることについて以下のように提案したい。

特定部分は6~10頁とし、専任の編集委員を置く。形式は論文、解説、評論とし、特定分野としては、天気予報に関するもの、具体的には天気予報の技法、予測情報の精度評価、予測情報の利用(経済効果)、予報に直接的に関係する事例解析等、新しい観測手法やその応用、気象情報の表示(display)技術等とする。

以下に提案の補足説明をする。

頁数 1論文の制限を考慮し、10頁を限度とする。

編集委員 研究者(大学または国立研究所)、気象庁関係者、民間会社、気象予報士で中央に5~6人。

形式 ここでの解説は初心者向けの入門講座、教育的なものとする。また文化、趣味、教養等には評論を充てる。レフェリーについては後述する。

特定部分を設けること 「天気」の論文等には対象分野の制限はなく、多様性は制度として保証されている。また解説、用語解説、情報の広場、気象談話室、各種学会の参加報告など多面的編集の努力もなされている。今後は特定の分野を充実させる努力も多様化につなげる一つの道であろう。

特定分野の選定 天気予報関係を選択したのは以下の理由による。数値予報の進歩で予報精度が向上し、社会での天気予報の利用が拡大した。気象予報士の制度がスタートし、気象庁の数値予報格子点データ(GPV)等の民間へのオンライン配信が開始され、気象資料の利用が拡大した。気象学会員中に37%を占める気象庁関係者の中には予報や観測現場に働く会員が多い¹²。また民間気象事業部門の会員も存在し、学会として特定分野の記事の拡大を始めるポテンシャルが存在

する。天気予報関係の論文等を多くして、研究者と現場との交流を深めることが出来る。

特定部分の構成では以下のことも提案したい。予測精度評価に気象庁の天気予報と数値予報GPVの精度評価を含めること。数値予報モデルの説明や精度評価は主として気象庁の部内誌に掲載される。気象庁の天気予報の精度評価は報道等に公表されている。しかしこれらが一般の学会員の目に触れる機会は少ない。気象予報士制度ができ、GPVが民間に公開された現在、GPVやある種の標準ともいべき気象庁の天気予報の精度評価が多様な利用者の目に触れる機会が必要である。気象学会がそのような場を提供すると共に、研究者と実務者の討論の場を形成することが大切と考える。同様な観点から気象庁の観測システムの変更に伴う比較観測結果の議論を掲載する等も必要である。

論文等のレフェリーは当然必要である。しかし研究者以外から多くの参加を求めするためには、垣根を低くする意味で読みやすくするためのアドバイザー的役割を主体にするなどの配慮が望ましい。

この試みを実現するためには、月例会「レーダー気象」や「大気大循環と長期予報」にならって、天気予報関係の月例会の組織化を支援するのも有効であろう。

5. その他の検討

「天気」に特定部分のページを設けるという提案をした。「天気」は会報で、純粋な論文誌ではない。新しい論文誌の創設は可能だろうか。

RMSが1994年にMeteorological Applicationsを発刊したのに伴い、英国気象局(UKMO)はThe Meteorological Magazineの発行を1993年12月号をもって打ち切った。米国では気象局発行の雑誌であったMonthly Weather Reviewが、1974年から同名のままAMSの発行にかわった。この経緯はわからないが、(発行形式の)新しい雑誌はそれまでのものを包含しつつより豊富な内容に発展している。

「天気」に天気予報に関する論文等を充実させようとする場合、気象庁の「研究時報」との関係念頭に置くことも必要であろう。投稿者層が重複する可能性がある。「研究時報」には天気予報に関する事例調査も多いが発行部数が少なく(およそ800部弱とのこと)、気象庁関係者以外の目には触れにくい。気象学会と気象庁は地方支部と管区気象台で研究会を共催するか、あるいは管区気象台の気候・調査課から「天気」

¹² 気象学会の主要な活動をになっている集団ではない。しかし気象学会の奨励金の主たる授与対象、地方支部主催の研究会への参加、地方で大会を開催する時の活動源等、学会との関係は密接である。

の地区編集委員に参加するなど、調査・研究の発展に緊密に協力し合っている。天気予報に密接に関係する研究・調査が学会の場でより広く議論され、その結果が現場にフィードバックされるという観点から「研究時報」と「天気」の相互関係について議論があってもよいのではなかろうか。

(当時：(財)日本気象協会 山岸米二郎)

参考文献

- 松野太郎, 1996: 上手なビッグサイエンスを, 天気, 43, 7.
 沖 大幹, 1995: 気象予報士と日本気象学会, 天気, 42, 249-250.
 高谷美正, 1995: イギリスで新しく刊行された雑誌「Meteorological Applications」について, 天気, 42, 28.

山岸会員の提案についての「天気」編集委員会の見解

はじめに山岸会員が「天気」の内容の充実について建設的な提言を寄せられたことに対し、編集委員会を代表して心からお礼申し上げる。会員の要望に応じて誌面の充実を図ることは編集委員会の主要な任務であることは申すまでもないことで、現在の委員会も歴代の委員会と同様に「天気」の内容充実に関して真剣に議論を続けている。しかしながら、具体的にその成果が反映されているかどうかとなると、残念ながら必ずしも十分とはいえないかも知れない。

そのような反省も含めて上掲の山岸米二郎会員の『「天気」編集への一つの提案』については編集委員会で検討させていただいていた。まだ最終的な見解の取り纏めは出来ていないが、とりあえず中間的な見解を付記しておきたい。

山岸会員も述べているように天気の内容充実についての提言は過去にもなされているが、残念ながら現状はこれに充分には応えているとはいえない。歴代の編集委員会も何とか会員の要望に応じて一層の内容の充実を実現しようと努力してきているが、諸々の事情で思うようには進んでいない。

まず読者に現在の天気の内容構成を再認識していただくために改めてその紹介をしよう。「天気」の投稿規定は各号の巻頭に掲載されているが、1991年から詳細な「投稿および内容案内」を各巻の1号巻末に掲載して投稿に便宜を図っている。

「天気」の任務としては、言うまでもなく学会の機関誌としての役割がある。学会活動についての情報の提供や学会員の活動要請は学会を円滑に運営するための最も重要な要素である。しかし、その性格上無味乾燥な内容であることも少なくなく、魅力ある誌面の要素ではない。これらについては概ね「学会だより」と

して取り扱っている。

「論文」や「短報」は、気象集誌が英文論文で構成され国際的な学会の顔であるのに対し、学会における唯一の和文による論文に誌面を提供する役割を果たしている。色々の考え方があろうが、現時点ではこのことを変更する必然性はないように思われる。

「解説」は原則として編集委員会からの執筆依頼によるが、会員からの投稿も掲載している。内容の目指すところは“気象学の最新の成果や関連する分野の興味深い話題をわかりやすく説明する報文”であるが、現状は合格点とは言い難い。難解とか話題が偏っているとの批判を耳にすることもある。

「気象談話室」は原則として「教育と普及」委員会からの依頼原稿であるが、会員からの積極的な投稿も歓迎している。「論文」や「解説」とは異なり、気楽に読める読み物として「天気」の新しい目玉を目指しての登場であったが、まだ所期の目標には程遠い状態である。

その他91年以来内容充実を目指した変更は、

- ①「月例会」の発展として学会主催の会議や研究会の報告を掲載する「研究会報告」の新設、
 - ②「日々の衛星画像」が諸般の事情で中止されたことの代替として、「新刊図書案内」による気象関連の図書情報の提供、
 - ③「News」の内容にオゾン層やエルニーニョの情報も加えた「気候情報」の新設、
 - ④会員からの学界関連の情報や話題の提供を掲載する「情報の広場」の新設
- などであり、様々な工夫が加味されている。

以上が現在の天気の内容の概略である。これに対し山岸会員は、特定分野（具体的には天気予報関係）